Ⅲ「大学で支援を受けている障害学生の支援ニーズと支援の実際に関する調査（研究２）」

本調査では，大学で支援を受けている聴覚障害学生・運動障害学生について、大学での支援と高校段階での支援の実態および障害当事者のニーズの自覚の変化について調査し、高校・大学の支援の階層性・連続性を考察することを目的とした。

【大学で支援を受けている聴覚障害学生の支援ニーズと支援の実際に関する調査】

１　はじめに

筑波大学では 2007 年度に障害学生支援室(OSD: Office for Students with Disabilities)が設置され，2008 年度からは専任の教員や非常勤職員が配置され、障害学生の支援体制が一層充実され、ピア・チューター（支援学生）の登録や申請、会計業務などを一括して職員が担当している。ピア・チューターとは従来の単なるチューターとは異なり、仲間（ピア）として一緒に支援について考え、支援に携わる学生のことを表している。

また筑波大学では聴覚障害学生とピア・チューターが協力して聴覚障害学生支援チームを形成し、支援活動の運営にも主体的に取り組んでいる。現在、OSD に支援を申請している聴覚障害学生が 17 名在籍している。聴覚障害学生支援の直接の担い手はピア・チューターであり、約 70 名の学生が支援に当たっている。主な支援システムは、複数の聴覚障害学生に対し複数のピア・チューターが支援する「派遣型システム」である。チームの活動内容は、講義や大学の公の行事等の情報サポートの他、ピア・チューターの派遣コーディネート、養成講座、勉強会、活動に使う物品

の管理・メンテナンスなどである。これらは、サークル活動ではなく、大学公認の活動として行われている。現在の主な支援方法はノートテイク、パソコン通訳、手話通訳である。これらの中から聴覚障害学生が希望に応じて申請することができ、ピア・チューターは可能な限り対応している。

ところで、筑波大学に在籍している聴覚障害学生の支援ニーズは様々である。情報サポート方法の中心は既に述べたような音声情報の文字への変換および要約であるが、殆どの学生は高校までこのような情報サポートを受けた経験が少なく、大学入学後に情報サポートを受けることにより、その意識が高まってくるというのが現状である。また、支援に対する意識も高校まで受けてきた教育歴（聾学校、インテグレート等）やコミュニケーション方法の違いによっても異なっていると考えられる。

本研究では、聴覚障害学生が筑波大学に入学後、情報サポートを受けることにより、支援ニーズが変化していくプロセスについて、質問紙法による調査をおこない、大学移行時のスムーズな支援方法のあり方について検討することを目的とした。

２　方法

2-1　対象

筑波大学に在籍し、情報サポートを受けている聴覚障害学生

2-2　調査紙の作成

高校までの教育歴、コミュニケーション方法、および大学入学後の支援方法や支援に対する考え方の変遷について質問紙を作成する。質問の主な項目は以下の通りである。

1）基礎情報：年齢、性別、所属、聴覚障害についてなど

2）高等学校までの状況

3）大学での状況

　　コミュニケーション方法、情報サポート、考え方

３　平成 20 年度の成果

平成 20 年度は，調査内容の検討および調査用紙作成を中心に行い，調査紙の作成まで終了した。

４　今後の予定

筑波大学在学生を対象に実施し、聴覚障害学生が筑波大学に入学後に情報サポートを受けることにより、支援ニーズが変化していくプロセスについて分析をおこなう予定である。